

# 温度を表す形容詞 lau と 日本語の「ぬるい」の意味についての一考察

柳 武 司

## 0. はじめに

五感を表す形容詞のうち温度を表す主要なドイツ語形容詞として heiß, kalt, kühl, lau, warm があるが, lau は独和辞典を参照すると日本語の形容詞「ぬるい」と意味的なずれがあるように感じられる。例えば lau として小学館の独和大辞典<sup>1)</sup>の用例中に「ein lauer Frühlingstag 暖かい春の日」とあり, 快適さを感じる和訳に思われる。形容詞 lau の和訳は, 小学館の独和大辞典では「ぬるい」が最初の和訳として記載されており, 「ぬるい」がこの形容詞の中核的な意味を表すとすれば現代語を用いている日本人の感覚として天候に「ぬるい」を付けるのには違和感がある。また, 「ぬるい」には不快な印象を感じる場合に用いることが多いように思われる。温度を表す形容詞で lau 以外の heiß, kalt, kühl, warm に対応する日本語として「暑い」「寒い」「涼しい」「暖かい」を天候に付けても違和感がないが, lau に対応する和訳の「ぬるい」を用いて「ぬるい日」や「ぬるい昼下がり」とすると幾分不自然さを感じる。そこで, 辞書記述や文学作品などの用例を参照して, lau と「ぬるい」に関して①液体と天候の両方あるいは片方を修飾する傾向と②快・不快に関するニュアンスの有無といった二点について考察したい。

## 1. 辞書記述と先行研究

日本独文学会文献情報データベース<sup>2)</sup>から対象文献を検索すると, ドイツ語形容詞 lau に関する文献は見当たらず, 温度を表す形容詞としては kalt を扱った論文が一つだけ確認された。扱っている内容は, 独和辞典執筆の際に温度以外を表す比喩的用法があまりに多数ある kalt の意味的な用法の分類に苦慮したことが書かれているが<sup>3)</sup>, 今回の lau に関する調査と

は直接関係しない。ドイツ語形容詞の lau に関しては、先行研究が見当たらないので、まずは独和辞典の和訳順と記述などを確認する。

### 1.1. 独和辞典<sup>4)</sup>

広範囲に使用されている学習辞典を確認すると、アクセス「①（液体が）ぬるい、なまぬるい ②（空気が）ほどよく暖かい、穏やかな ③（態度などが）煮え切らない、あいまいな」、アポロンは「①ぬるい、生暖かい；（風などが）ほどよく温かい ②煮え切らない、熱意のない」、クラウン「①（a）（湯などが）ぬるい、微温の（b）（天候などが）温暖な、生暖かい ②曖昧な；熱のこもらない」となっている。小学館の独和大辞典では「1 a）（飲食物・ふろの水などが）ぬるい b）（陽気が）[なま] あたたかい、温暖な 2 微温的な、不決断な 3《方言》無償で」である。

いずれの辞書も番号の振り方などは異なるが、「液体の場合の温度」→「天候など気体の温度」→「性格や性質」の順になっていて、ほぼ同様の意味の順番と区切りになっている。この順序と区切り方は Duden などのドイツ語辞典に従っていることが推測されるので確認する。

### 1.2. ドイツ語辞典<sup>5)</sup>

Duden（1994）を参照すると、„1.a）（von Flüssigkeiten）weder warm noch kalt, mäßig warm b）（von der Luft, Witterung）[angenehm] mild 2. in nicht einschätzbarer Weise unsicher, unentschlossen, halbherzig“「1.a）（液体について）温かくも冷たくもない、適度に温かい b）（空気、天気について）[心地よく] 穏やかな 2. 評価できずに心もとなく、優柔不断で、中途半端な」となっている。順番としては「液体の温度」→「天候など気体の温度」→「性格や性質」で、独和辞典がこの順番を元に記述している。Duden によれば、warm でも kalt でもない温度ということでその中間に位置する温度になるが、lau には比較級と最上級の変化形も記載されている。温度を表す形容詞ということで、温度がより低ければ kühl もしくは kalt、より高ければ warm になりそうだが、温度以外の比喩的な意味で使われる場合に比較変化が可能としているのか、語形変化のみの記載で、比較変化した用法は見当たらない。次に形容詞の Valenz 辞典である Sommerfeldt（1977）を参照すると<sup>6)</sup>、最初の意味として mild「程よい」とし、天候や物質などの用例

として „der laue Abend, Der Abend ist lau. Ein laues Bad, laue Milch, laue Lüfte“ が記述されている。お風呂の温度や温めた牛乳などが「程よい」温度を表す lau としている。2 つ目の意味として „ohne starke Beteiligung“ 「強い共感なし」とし、性格や態度についての用例がある。この Sommerfeldt の意味に従うと、気温やお風呂、牛乳などの温度に関しては適温ということになる。少し用例は古いが、最大の辞書である Grimm 辞典（1984）も確認する。見出し語 LAU を参照すると、見出し語の横に品詞として adj. であり、次にラテン語で lau に該当するであろう tepidus（ドイツ語：lauwarm）が書かれている。記述内容として 1) には ahd. からの語形と意味関連があり、温度として kalt と warm の間 „zwischen kaltem und warmen“, 天候に関しては mild としている。また、2) に意味として „lau ist was nicht oder nicht mehr entschieden warm empfunden wird“ 「lau は、明らかに温かいと感じられない、あるいはもはや感じられない」とある。付加語的な用例として „laues wasser“ と „laue milch“ の記述があるが、名詞句だけなので快適かどうか不明である。3) には „übertragen auf das innere leben des menschen, lässig, nicht feurig oder thatkräftig“ 「比喩的な意味で人間の内面的な活気に係わるもので、淡々として、熱意がない、または精力的ではない」とあり、4) も比喩的な用法である。

### 1.3. 日本語形容詞「ぬるい」

語義を確認すべく、現代語として『学研国語大辞典』の「ぬるい」を参照すると、二つの意味に大別され、最初に「①[水温などが]なまあたたかい。また、ふろなどの湯が適温よりやや低い。」とあり、用例として「お茶がぬるい」「ぬるいふろだと、かぜをひく」の二例がある。二つ目の意味は比喩的な意味で「[やり方・処置などが]きびしくない。てぬるい。なまぬるい。」とある。すなわち液体の温度とやり方についての用法しかなく、lau のように気温の用法は記載されていない。また、『日本語 語感の辞典』の「ぬるい」の記述を挙げると、「通常の熱さより温度が低い場合の感じをさして、くだけた会話から硬い文書まで幅広く使われる日常の基本的な和語。＜ぬるい湯にゆったりと浸かる＞※熱いお茶が冷めかけたり冷たいジュースが温まりかけたり、その温度を好ましくないと思う例が多く、小沼丹の『外来者』も、周囲に気を取られているうちにビールは

すっかりぬるくなっているのであると結ばれる。」とある。すなわち、「ぬるい」は熱いはずの液体の温度が低い場合と同時に、冷たいはずの液体の温度が高い場合にも用いており、これは久島（1997）のいう「あるべき温度が十分でない」に該当する。また、久島の論文での主な主張は「物」と「場所」の対立に関するもので、今回の「ぬるい」が物にしか修飾できないことについても述べている。久島は「冷たい」「ぬるい」は「～物」「これは～」といえて、「寒い」「涼しい」は「～場所」「ここは～」と言える、としている。その理由として「温度感覚は自覚的であるために、《非統一的（局所的）感覚》か《統一的感觉》かという対立」<sup>7)</sup>があるためと述べている。例えば「ぬるい」は「ぬるがる」とは用いられず、「寒い」は「寒がる」が言える「自覚的」つまり主観的な形容詞であり、この対立が日本語形容詞で「物」と「場所」を修飾する際の区別になっていることも述べている。ここでドイツ語形容詞の *lau* や *kühl* が「物」にも「場所」にも修飾可能であることを考えると、久島の述べるこの区別はドイツ語の温度を表す形容詞にはない。

語学的な方法以外に、宮崎（2003）が心理学的な方法によって日本語の形容詞に関する快・不快に関して標準化を試みているが、「かな表記による文字数が7文字以下であり、現代での使用頻度が比較的高い」<sup>8)</sup>と考えられる形容詞に「ぬるい」は含まれていなかった。楠見（1988）でも「ぬるい」は扱われておらず、温度を表す形容詞としては専ら「あたたかい・つめたい」だけが対象として扱われている。

## 2. ドイツ語文学作品

ドイツ語の *lau* の意味として日本語の「ぬるい」と同じ「あるべき温度が十分でない」の意味を持つのか、前後関係から読み取りやすい文学作品中に生起する *lau* を調査したい<sup>9)</sup>。対象とした *lau* の生起数は、調査作品が多いに関わらず8例しかなかった。そのうち5例は付加語的用法になり、列記すると用例1) „am lauen Sommerabend“ (Die Harzreise) 「温暖な夏の夕方に」、用例2) „ein lauer Wind“ (Der grüne Heinrich) 「温暖な風」、用例3) „mit dem lauen frühzeitigen Lenzhauche“ (Der grüne Heinrich) 「温暖な早朝の春の息吹で」、用例4) „Der laue Abendwind (Traumland) “ 「温暖な夕方の風」、用例5) „die Stille einer lauen Mondnacht“ (Agathodämon) 「温

暖な月夜の静けさ」で、いずれも温暖な天候に関する意味を持つ lau で快適な様を表している。付加語的用法ではない残りの3用例は以下の通り。

用例6) „Aber die Stimme, die nun von ganz nahe auf mich einsprach, kam lau und süßlich an mein Gesicht...“ (Malte) 「しかし、すぐ近くから私に話しかけてきたその声は、ほのあたたかく、甘く、私の顔に近づいて来た」

用例7) „man sah weit in Gärten hinein, die immer künstlicher wurden, bis es dicht und lau an den Augen war wie in einem Treibhaus“ (Malte) 「庭園の遠くまで見渡すことができた。庭園はますます芸術的なものになり、温室にいるように、目のあたりが密になって、ほのあたたかいまでに」

用例8) „Er (Nikolaj) erkannte sie förmlich, alle diese Sekündchen, gleich lau, eine wie die andere, aber schnell, aber schnell.“ (Malte) 「ニコライは時間をまぎれもなく認識した、全ての秒を、いずれも同様にほのあたたかく、しかし速く、速く。」

和訳はいずれも著者によるもので、lau の和訳を「ぬるく」ではなく、「ほのあたたかい / く」とした。液体以外に「ぬるい」の訳を付けるのは日本語として不適切と思われたためであるが、「生あたたかく」と訳すと「中途半端（生）にあたたかい」という不快なニュアンスが含まれるような感じがするので、「ほのあたたかい」とした。また、結果としていずれの用例も気温を表したもので液体を表す用法はない。もっとも文学作品中でぬるいビール (laues Bier) を飲んだり、ぬるいお風呂 (laues Bad) に入浴したりする場面を描写する必要性はあまりないだろう。

### 3. DWDS<sup>10)</sup> での検索

文学作品ほどの前後関係の記述はないが、用例の少なさを補うために DWDS で lau を検索する。結果として、DWDS-Kernkorpus (2000-2010) 2024/10/28 取得で 62、DWDS-Kernkorpus (1900-1999) 2024/10/28 取得で<sup>11)</sup> 576 の用例が出力された。

検索対象となった用例の幾つかを取り上げると、lau の用例は „Die Luft auf der Straße war lau.“ のように天候を表す用例が多い。また、液体である Wasser を修飾する用例も多いが、単に „Das Wasser war lau.“ だけの前後の

文脈がない用例もある。

用例 10) „Wir tranken mehr als gewöhnlich, sogar Hugo goß sich einen Schuß Rum in das laue Teewasser, und wir lachten immer lauter und schriller über Witze, die wir längst kannten.“ (Hahn, Ulla: Unscharfe Bilder, München: Deutsche Verlags-Anstalt 2003, S. 116)

「私たちはいつもよりたくさん飲み、それどころかフーゴはぬるくなった紅茶のお湯にラム酒を一杯注ぎ、私たちは昔から知っているジョークでますます大きな声で笑った。」

用例 11) „Vorratsgefäße nach Freiwerden sofort reinigen (erst kaltes, dann laues Wasser, dann Reinigungslösung, Spülen, Nachdämpfen) .“ (Grahneis, Heinz u. Horn, Karlwilhelm (Hg.), Taschenbuch der Hygiene, Berlin: Verlag Volk u. Gesundheit 1972 [1967], S. 485)

「放出後すぐに貯蔵容器を洗浄する(最初は冷水、次にぬるい水(ぬるま湯)、次に洗浄液、すすぎ、蒸気仕上げ)」

用例 12) „Die angeschnittene Wurst verliert die Farbe, der Tee wird lau, dann kalt und schwarz.“ ( Fries, Fritz Rudolf: Der Weg nach Oobliadooh, Frankfurt a. M.: Suhrkamp 1966, S. 293)

「切ったソーセージは色を失い、紅茶はぬるくなり、やがて冷たくなって黒くなる。」

DWDS の用例の和訳は筆者によるもので、いずれの lau も「ぬるい」と訳したが違和感はない。液体に「ぬるい」を付けた和訳はしっくりくるが、和訳すると「ぬるい」が不快な印象を含むように思われるが、ドイツ語は同様ではないだろう。

#### 4. Google を利用した日本語用例調査<sup>12)</sup>

ドイツ文学作品中の lau を調査した際に採取数があまりに少なかったの  
で、日本文学作品中の「ぬるい」も同様の結果になることが予想された。  
そこでインターネットの電子図書館である「青空文庫」<sup>13)</sup> 中の作品を対象  
に「ぬるい」がどの程度採取できるか調査した。対象とした作家は夏目漱  
石 8 作品と太宰治 8 作品で<sup>14)</sup>、「生」を付けた用例を含めると夏目漱石  
では『坊っちゃん』に「生温い言葉」「手温い事」の 2 例、『草枕』に「生温  
い磯」「生温い水」,『こころ』に「手緩い事」「生温い事」,『明暗』に「生

温い番茶」「微温い表現」,『門』に「生温い眼」,『吾輩は猫である』に水の温度を表して「筥棒に温いや」であった。太宰治の8作品には「生」を加えても「ぬるい」はなかった。この結果から調査範囲を拡大しても天候を表す用例を見つけることは難しいと判断し、Google を利用し天候など、「物」以外の「風」や「日」などの名詞に「ぬるい」を付けて検索した。2024 年 11 月 2 日に調査して確認できた用法は、「エアコンからぬるい風が出る」「岩田宏著『ぬるい風』草思社出版」,「今日は暑いというかぬるい日」<sup>15)</sup>「ぬるい釣り場で 1 ポイントげっと」<sup>16)</sup>「夏のぬるい夕方が好き」<sup>17)</sup>「やがてぬるい季節は」<sup>18)</sup>「ぬるい季節です, が!」<sup>19)</sup>などが Web 上で公開されていた。特に多かったのが「ぬるい風」で約 548,000 件が対象となり、それに「エアコン」と AND 検索をかけると約 146,000 件が対象となった。「ぬるい」がエアコンから出る風が「あるべき温度が十分でない」ことを表している。それ以外の用法は、主にブログ中の文章で、かなりくだけた調子で書いているようである。「ぬるい」が「お湯」「お風呂」「ビール」など液体を修飾する用例は、件数をここに記さないが、多数が確認された。

## 5. 考察

本稿「0. はじめに」で調査対象とした二点に関して考察する。

### ① 液体と天候の両方あるいは片方を修飾する傾向

物としての液体の温度について述べる場合、日独では同様に物を形容していることが確認された。天候に関しては、lau は文学作品中でも、辞書記述や DWDS の用例からも用例を得ることができたが、日本語の「ぬるい」は文学作品などいわゆる硬い文章では見つからず、Web のブログの記述など比較的柔らかい文章で見つかった。現代語ではこのような状況であるが、日本国語大辞典の用例を参照すると<sup>20)</sup>、「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。」(枕草子：996 年頃 -1008 年)や「正月二十日ばかりになれば、空もをかしきほどに、風ぬるく吹きて、御前の梅も盛りになりゆく。」(源氏物語 若菜 下：1001-14 頃)など平安時代の文章では、頻繁に天候にも用いられていた。平安時代に「ぬるき」が液体を形容していたかは本論文では調査しないが、ドイツ語の lau が頻繁に天候を修飾する状況とは異なり、現代語では「ぬるい」が特に文章語で天候を修飾する頻度は極めて少なくなっているように思わ

れる。天候を表す温度の形容詞は「ぬるい」に「生」を付けて「生ぬるい」あるいは「生暖かい」という温度を表す形容詞に「生」を付けた語があり、これらの語が頻繁に用いられるようになり取って代わられたか。いずれにせよ液体か天候かという区別は、日本語では発音は同じであるが「熱い」「暑い」「温かい」「暖かい」と漢字を分けて区別していることから日本語話者にとって重要である。

## ② 快・不快に関するニュアンスの有無

日本語形容詞「ぬるい」に対する快・不快といったおよその感覚を確認して lau と比較したい。「ぬるい」の場合、上述した『日本語 語感の辞典』で「その温度を好ましくないと思う例が多く」とあり、「好ましくない」は不快を表している。「ぬるい」を用いる多くの用例が結果として不快を表しているためであろう。それに対して久島（1997：73）は「ぬるい」と「生ぬるい」に関しては「《本来の温度が不十分だ》という意味と《不快》とは必ずしも一致しない理由として『ぬるい風呂で気持ちがいい』と言えるから」と述べている。熱すぎたり冷たすぎたりした場合に生理学的限界を意識はするが、接触して温度に対する反応を表す形容詞そのものには、それ自体に快・不快はない。形容詞は単体で使われることはなく、主に名詞を修飾し、話者の主観的評価が加わりながら形容詞と名詞が合わさって快・不快の評価が下される。快・不快の評価が入るのは、温度を表す時ではなく比喩的な用法で見られる。例えば「冷たい水」は、夏の暑い日に飲むには快適さを感じるが、零度以下の寒い日に出されても快適とは感じない。温度に対する評価は状況次第である。しかし、比喩的に態度を表す用法で「冷たい人」となると不快な印象を受ける。楠見（1988）などの心理学的手法による形容詞の評価は、温度感覚の表現と比喩的な用法の両方を合わせての評価がなされている。「ぬるい」が温度ではなく、心理・態度などを表す比喩的な用法で用いられる際には「本来の温度が不十分だ」の意味が強調されて「(処置などが) 厳しくない、不適当なゆるさのある」など不快な意味を表す。

これに対して warm でも kalt でもない温度とされるドイツ語の lau に快・不快はあるのだろうか。天候に関する付加語的用法の用例 1) から 6) は、いずれも過ごしやすい気候になったことを表す際の表現で、述語的用

法とみられる文中の用例 7) から 8) も süßlich と共起するなど不快ではなく、快適さを感じるものである。液体を修飾する用例として DWDS の用例 10) の „einen Schuß Rum in das laue Teewasser“ 「ぬるくなった紅茶にラム酒を一杯注ぎ」や用例 11) の料理の説明, 用例 1 2) の „der Tee wird lau“ 「紅茶はぬるくなり」は、快・不快ではなく、熱い温度から低下したという客観的描写をしているように読み取れる。確かに google.de で „laues Bier“ を検索するとビールが温まって美味しくないことを述べる用例ばかりであるが、それは lau 自体の意味ではなく、本来は kühl か kalt であるはずのビールが lau になってしまったという状況に対して不快を感じているのであって、lau 自体に快・不快はない。DWDS で風呂のお湯の温度に関して „Ein laues Bad (27°) sei ein königliches Fest deiner Haut!“ 「ぬるいお風呂 (27 度) は、あなたのお肌の最高の喜びだ！」<sup>21)</sup> の用例があり、lau は快・不快とは関係のない温度を表している。個人によって差があるだろうが lau と「ぬるい」を含めた温度に関するおよその関係について図 1 に示す<sup>22)</sup>。

日本語では修飾する名詞によって温度の上下で異なる「ぬるい」が

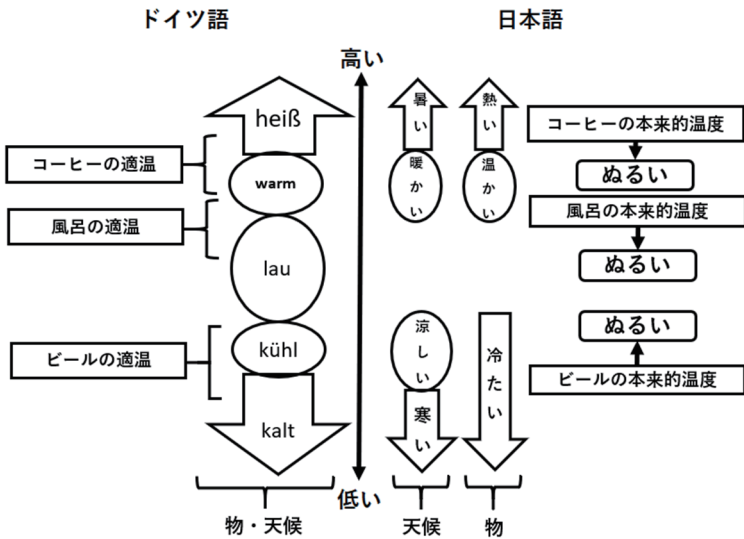


図 1 : lau と「ぬるい」と他の温度を表す形容詞関係図

あり、例えばお茶やみそ汁、お酒、風呂などそれぞれ適温とされる温度があり、その温度が保たれているかどうかを評価する。例えば風呂の温度は適温を超過すると「熱すぎる」、下がると「ぬるい」になる。これに対してドイツ語の lau は一定の温度帯にあることが基本になり、lau と「ぬるい」はその尺度が異なっている。例えばドイツ語でのビールの適温は kalt から kühl で、それ以上の温度になると lau になり、日本語の「本来の温度」というよりも kühl よりも高温であるという温度の上下を基準とした観点に基づいている。

ドイツ語の lau は、温度そのものを表す用法ではなく、小学館の独和大辞典の 2 にある「eine laue Kritik 生ぬるい批評」のような比喩的な用法として態度などを表す場合は、日本語の「ぬるい」と同様に曖昧な態度を表すことは同様であるが、„weder warm noch kalt “であって「ぬるい」が持つ「本来の温度が不十分だ」から派生した意味とは異なり、温かくも冷たくもない中途半端な温度ということから「不決断な」などの不快な意味を持つことになる。

考察の対象にはしていなかったが、本稿 1.2. で lau に比較級と最上級があることについて言及したので少し述べると、液体を修飾する比較変化のある用法は DWDS にはなく、google.de で調べると少し古いが 1861 年 2 月のある会報で用例 13) „So oft ich nun in der Folge abgestandenes ,laueres Wasser aus der Küche zum Giessen nahm, schwieg jenes Zirpen “<sup>(23)</sup>「私がその後台所から置きっぱなしのもっとぬるい水をやるたびに、あの鳴き声は止んだ。」と水を修飾する比較級の lau が用いられていた。この文の少し前に „frisches kaltes Wasser “「新鮮な冷たい水」があり、それよりも温度が高い水であることを表すために比較級を用いていると思われ、warm とまでは言えないが kalt よりも温度が高いことを示している。日本語の「ぬるい」が表す「本来の温度」とは異なり、温度の上下についてのみの表現である。DWDS で比較級・最上級になる lau の用例は、上述の比較級の用例以外はいずれも気温か態度が不決断を表す用法であった。液体を表す lau に比較変化する用例が少なく、気温や態度を表す用例の方が多い理由を考えると、液体の温度で lau が使用されるのは飲料やお風呂で、一定の温度が求められるのに対し、気温は季節が移り行く中で寒い時期から暖くなる時期へと移行する際に気温を比較する頻度が高いためであろう。そして、

不決断な態度を表す比喩的な用法の *lau* の比較変化は、例えば DWDS で最上級を検索すると 7 例あり<sup>24)</sup>、2 例が気温で、残り 5 例が態度を表す用例である。態度を表す *lau* の場合、*warm* でも *kalt* でもない中途半端なことが強調されるので、中途半端さに差異、つまり程度性が生じるために比較変化が生じやすいのではないか。

## 6. 終わりに

今回の調査対象として「① 液体と天候の両方あるいは片方を修飾する傾向」については、日本語に久島（1997）の言う「物」と「場所」の区別があるのに対して、ドイツ語にはそれがないことによって修飾する名詞の種別に差異があることを述べた。文学作品から *lau* や「ぬるい」を採取したが、暑くも寒くもないことを表現する必要性に迫られることはあまりないと思われ、用例が少なかった。「② 快・不快に関するニュアンスの有無」に関しては、日独いずれも「温度」を表す場合にはそのニュアンスがないが、用例としてドイツ語は天候を表す場合には快適さを表し、現代の日本語では「生」を付けないと硬い文章ではあまり使用されず、「生ぬるい」は不快を表している。液体を修飾する場合は、いずれの言語でも飲料は不快なことを表す用例が多かったが、お風呂についての „Ein laues Bad“ は快適さを示す用例であった。直訳すると「ぬるいお風呂」になり、日本語ではよくないので意識して「ぬるめのお風呂」にした方がよいかも知れない。また、日本語の「生ぬるい」に関しては「生」が同様に付く「生暖かい」もほぼ同様の意味を表していると思われ、この場合「ぬるい」と「暖かい」の意味は温度がある程度高くて「生」が中途半端である不快な意味を表している。

考察において温度に関して図式化したが、温度に対する実際の評価に関しては、日独言語の違いというよりも文化的・習慣的なちがいであろう。例えばお風呂のお湯は、日本人は 40 度程度がよく、35 度だとぬるい。DWDS の用例で風呂の温度が 27 度がよいとする場合もあるようだが、風邪をひくと体温より 5 度程度低い温度の湯に浸かって熱を下げるというドイツ人の感覚なのか、日本人の感覚としてお風呂が 27 度なら日常的な入浴に際して許容できるものではない。もっとも飲み物のビールに関しては、「ビールが一番おいしい温度は、夏なら 4～6℃、冬なら 6～8℃がおすすめ」

とサントリーが述べ<sup>25)</sup>、ドイツ語のサイトの一つでは「Ale が 8 から 12 度、Lager が 5 から 7 度、Weizen が 7 から 9 度」<sup>26)</sup> と、日本よりはやや高いがそれ程の差があるとは言えないだろう。

今後の展開としては、図 1 のように連続した感覚を扱う上では、温度を表す形容詞に関して heiß, warm, kühl, kalt と対応する日本語形容詞も加えて総合的に考察する必要があるだろう。

## 註

- 1) 小学館 独和大辞典 lau の項を参照。
- 2) <https://www.jgg.jp/jggdb/> にて 2024 年 10 月 16 日に検索。
- 3) 加藤 (1978) 参照。
- 4) 対象とした辞書は文献一覧中の「2. 辞書」に記載した独和辞典の lau の項を参照し、和訳のみを抽出した。
- 5) ドイツ語の辞書に関しては、語源などを省き、意味記述に関する項目について抽出した。
- 6) Sommerfeldt, K.-E./Schreiber, H. (1977) lau の項参照。lau の項には、およそ次のような記述になっている。(„Anim“ は生物か非生物かの意義素の区別)  
V1=,mild' attr (der laue Abend), präd (Der Abend ist lau.) -Anim (ein laues Bad, laue Milch, laue Lüfte)  
V2=,ohne starke Beteiligung' Attr (laue Gefühle), präd (Ihre Gefühle füreinander waren lau geworden.), Abstr (lauer Eifer, laue Anteilnahme)
- 7) 久島 (1977) 77 頁の「5. 結び」参照。
- 8) 宮崎他 (2003) 調査の手順を記す「方法」での形容語 (形容詞・形容動詞) の選定。
- 9) <https://www.gutenberg.org/> (2024 年 10 月 21 日取得) とデータコーパス CD の Gutenberg-DE Edition 7. を利用し、Chamisso 作 Peter Schlemihls wundersame Geschichte, Goethe 作 Die Leiden des jungen Werther と Die Wahlverwandtschaften, Hebbel 作 Die Kuh, Heine 作 Die Harzreise と Die Nordsee, Hofmannsthal 作 Die Frau ohne Schatten と Reitergeschichte, Kafka 作 Das Schloss, Die Verwandlung, Der Prozess, Keller 作 Der grüne Heinrich,

Kleist 作 Das Bettelweib von Locarno と Das Erdbeben in Chili・Der Findling・Der Zweikampf・Die heilige Cäcilie・Die Marquise von O・Die Verlobung in St. Domingo・Michael Kohlhaas, Lessing 作 Laokoon, Mörike 作 Mozart auf der Reise nach Prag, Novalis 作 Heinrich von Ofterdingen, Raabe 作 Else von der Tanne, Rilke 作 Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge, Stifter 作 Bunte Steine, Storm 作 Immensee, Tieck 作 Die beiden merkwürdigsten Tage aus Siegmunds Leben, Trakl 作 Traumland, Wieland 作 Agathodämon の 30 作品デジタルデータから lau を検索して調査した。各用例の後のカッコは作品名が分かるように表記した。なお, lau の下線は筆者が加えた。以降の用例も同様。

- 10) Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache, <https://www.dwds.de> を利用。
- 11) 用例の後のカッコ内は DWDS が記載した引用箇所を示す。
- 12) <https://www.google.co.jp> を利用。日本語の用法に関してより詳細な調査をするためには有料の新聞記事データベースの利用が考えられる。
- 13) <https://www.aozora.gr.jp> (2024 年 11 月 2 日調査)。なお、用例中の「ぬるい」に該当する箇所の下線を加えた。
- 14) 新字新仮名がある場合はその作品を対象とした。夏目漱石の対象作品は『坊っちゃん』『三四郎』『草枕』『こころ』『それから』『明暗』『門』『吾輩は猫である』, 太宰治は『ダス・ゲマイネ』『富嶽百景』『女生徒』『走れメロス』『津軽』『ヴィヨンの妻』『斜陽』『人間失格』。
- 15) <https://x.com/GK0322/status/1813718822438019156> 一般の X ユーザと思われる。以下同様に一般ユーザと思われる。
- 16) <https://ameblo.jp/obamashimisame/entry-12871449311.html>
- 17) <https://x.com/meguhazi1/status/1683791336791760898>
- 18) <https://miwa0524.hatenablog.com/entry/2019/02/24/164729>
- 19) [https://www.chugakjuken.com/koushi\\_blog/miyake/post\\_135.html](https://www.chugakjuken.com/koushi_blog/miyake/post_135.html)
- 20) 日本国語大辞典 (2001) 「ぬるい」の項参照。下線部は筆者による。
- 21) <https://www.dwds.de/d/korpora/dwdsxl> (2024 年 11 月 3 日取得)  
Gegenwartskorpora mit freiem Zugang で条件 ({lau} #5 @Bad) を加えて検索し、  
検索結果の 3 行目用例 (Altenberg, Peter: Prödromos. In: Deutsche Literatur von  
Lessing bis Kafka, Berlin: Directmedia Publ. 2000 [1906], S. 865)

- 22) 図1で「物」と「天候」の温度を表す形容詞を横軸で同じ位置にしたが、実際には例えばお風呂が温かいと感じる40度を天候にも「暖かい」とするのかという異なる。図1では温度が同じという意味ではなく、形容詞の温度的上下の順序付けが同じという意味で合わせている。また、図中の日本語の「熱い」「暑い」と「温かい」「暖かい」は平仮名で表記すると同一になるが、物と天候に対する温度を漢字で区別しているので分けて記した。また、「物」に対して「涼しい」に対応する語がなく、「冷たい」がそこに充当されていることについては、久島（1997）75頁参照。
- 23) [https://www.zobodat.at/pdf/VerhMittNaturwissHermannstadt\\_12\\_0017-0018.pdf](https://www.zobodat.at/pdf/VerhMittNaturwissHermannstadt_12_0017-0018.pdf)（2024/11/9 取得）
- 24) 2024年11月9日にGegenwartskorporaで1897年から2024年の期間を検索。
- 25) <https://www.suntory.co.jp/customer/faq/001711.htm>（2024/10/22 取得）
- 26) <https://www.bier.de/>（2024/10/22 取得）

## 参考文献

### 1. 参考文献

- 加藤宏：形容詞 kalt の場合 -- 独和辞典執筆作業の報告 -- 『上智大学ドイツ文学論集』15号1978. 62～80頁
- 久島茂：温度を表す形容詞の意味体系 — 《物》と《場所》の対立 — 『日本語科学』2 1997. 62～80頁
- 国立国語研究所 [編]：分類語彙表増補改訂版 国立国語研究所資料集14 2004.
- 楠見孝：共感覚的メタファの心理 - 語彙論的分析『記号学研究 8』日本記号学会編1988. 237～248頁
- 宮崎拓哉他：名詞、および形容語の感情価 - 快・不快次元についての標準化 - 『イメージ心理学研究 1 (1)』北海道大学 2003. 48～59頁

### 2. 辞書

- Dornseiff, F.: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen. Walter de Gruyter 8. Aufl. 2004. Berlin.

Duden ≧ Das große Wörterbuch der deutschen Sprache ≦ : in acht Bänden. 2.Aufl.  
1994. Mannheim.

Grimm, Jacob, Wilhelm : Deutsches Wörterbuch. 1984. München (ペーパーバック)

濱川祥枝 [編] : クラウン独和辞典 三省堂 2014.

金田一晴彦他 [編] : 学研国語大辞典 学習研究社 1980.

国松孝二他 [編] : 独和大辞典 小学館 1990.

中村明 : 日本語 語感の辞典 岩波書店 2020.

根本道也他 [編] : アポロン独和辞典 2014.

日本国語大辞典編集委員会他 [編] : 日本国語大辞典 第二版 小学館 2001.

在間進 [編] : アクセス独和辞典 三修社 2010.

Sommerfeldt, K.-E./Schreiber, H. : Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher  
Adjektiv. 1977. Leipzig.

### 3. データコーパス CD

Gutenberg-DE Edition 7. Das Literatur Archiv Internet-Dienste Hille & Partner GbR.

